

# あばら家の美学

— 絵巻に描かれた荒廃 —

## 山本陽子\*

### 序 簀子縁すゐごえんの描写から

まずは『源氏物語絵巻』「蓬生」の場面(1)を見てほしい。都に戻った光源氏がある夜、かつて通った不器量な姫君、末摘花の家の近くを通りかかり、ふと思いついて出てきた不器量な姫君、末摘花の家の近くを通りかかると、従者の惟光と、傘を差し掛けられる源氏の後姿、右端に几帳の陰から覗く寝た侍女、その間に広がる庭一面に描かれていたはずの草々は、絵具の緑青が剥げ落ちて痕跡ばかりになっている。

目に入るのは、侍女の足下の簀子縁すゐごえんの朽ちようである(図1)。かつては繊細な作りであった欄干の角材は折れて失われ、踏板は歪み、幾枚かは外れて、所々に穴が空いている。横木は折れて斜めに垂れ下がり、端は折れて土の上で腐りつつある。個々の材木には所々筆を揺らして風化した年月を表わすように薄墨が斑に塗られ、新たな断面には赤みがかった絵具が差され、虫損の様を表わされる。柱と板の合わせ目から生え出した種々の小さな草の葉は、緑青を点じて描かれ、踏板の抜けた穴か



図1 徳川美術館所蔵『源氏物語絵巻』「蓬生」(部分) 簀子縁

照(2)ならば、まだ解る。しかし貴人の目を喜ばせる贅を尽くした豪華な物語絵巻の中で、なぜ醜いあばら家の簀子縁をここまで詳細に描いたのであろうか。

### 一 「蓬生」の記述

王朝貴族の物語にあって、荒れ果てた邸宅が生々しく表現されたのは、この絵巻の絵ばかりではない。末摘花の邸宅の荒れようは、『源氏物語』本文(3)にも、源氏が左遷されて都を去った後も、自らの生き方を変えなかった当人の困窮ぶりを象徴して、

かかるままに、浅茅は庭の面(4)も見えず、しげき蓬は軒をあらそひて

生ひのぼる。葎は西東の御門を閉ぢ籠めたるぞ頼もしけれど、崩れがちなるめぐりの垣を馬牛などの踏みならしたる道にて、春夏になれば、放ち飼ふの心さへぞめざましき。

八月、野分荒かりし年、廊どもも倒れ伏し、下の屋どももの、はかなき板葺なりなどは骨のみわづかに残りて、立ちとまる下衆だになし煙絶えて、あはれにいみじきこと多かり。

と、極めて具体的に述べられている。花散里を訪ねる途上の源氏がこの「形もなく荒れたる家の、木立茂く森のやうなる」に気付き、末摘花を思い出して立寄る場面も、

大きな松に藤の咲きかかりて、月影になよびたる、(中略)柳もいたうしだりて、築地もさはらねば、乱れ伏したり。

とあり、絵巻の左上の松と藤の痕跡はこれを表わしたのである。

この廃園のいささかでも詩的な描写に対し、末摘花はやや滑稽に、漏り濡れたる廂の端つ方おし拭はせて、ここかこの御坐ひきつくるはせなどしつ

嗅く様子が記され、絵巻の絵の惟光に露を払わせつつ入る場面は、

御指貫の裾はいたうそぼちぬめり。昔だにあるかなきかなりし中門など、まして形もなくなりて、入りたまふにつけても、いと無徳なるを、立ちまじり見る人なきぞ心やすかりける。

そして久々に二人で語らう場面では建物の腐朽ぶりが、

月入り方になりて、西の妻戸の開きたるより、さはるべき渡殿だつ屋もなく、軒のつまも残りなければいとはなやかにさし入りたれば

と、舞台効果の如く記述されている。

平安時代の富める貴族の子女達の間で創られ、もてはやされたこの美的な物語と絵巻の中で、窮乏の極みにある邸宅の荒廃が、なぜここまで生々しく表わされねばならなかったのか。

## 二 「貧苦」としての描写

あばら家は貧困を象徴する要素であり、当然、厭うべきものであった。鎌倉時代前半の聖衆来迎寺所蔵六道絵は、その残酷なまでに写実的な描写で知られる。仏画とはいえ世俗的場面の表現も巧みであり、「人道苦相」Ⅱ幅の四苦八苦の一つ「求不得苦」の舞台として、荒廃した家が描かれている(図2)。色紙形の「求不得苦」が説かれた「食不満口衣不隠肌 風雨侵家 燈燭苦光」の句を絵画化したもので、右に空の笠の置かれた火の気のない台所、中央で頬杖をつき膝を抱える破れた衣の人物を中心に、裸で手を出したり泣いたりする子供達、左の仏間には手を合わせる弊衣の男がいる。

この困窮した一族の家も、その荒廃ぶりが強調されている。柱は傾き折れ、家全体が手前に大きく傾き、斜にあてがわれた丸太一本で、辛うじて倒壊することから免れている。壁土は至る所で落ち、下地の木舞が

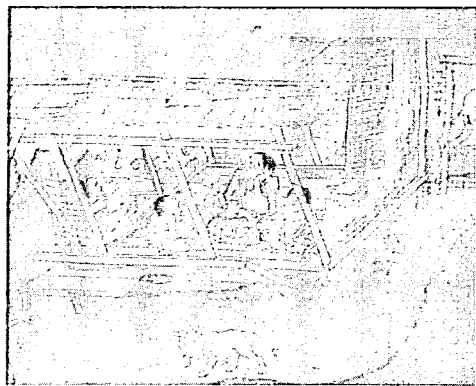


図2 聖衆来迎寺所蔵六道絵「人道苦相」Ⅱ幅「求不得苦」

剥き出しになり、右端ではそれさえ崩れて内部が丸見えになっている。屋根板は腐って穴があき、端の方は抜けたように失われている。縁側は柱が折れ、庭には腐った下駄が脱ぎ散らされたままで、入り込んだ乞食のような襦袢を着た男に、犬が吠えかかる。手入れのされない家屋の傷み方が、実に具体的に細かく描写されているのである。

同じ「人道苦相」Ⅱ幅の中でも「愛別離苦」では、馬に乗って振り返る武者と、追いつがる幼児を抱き止める女や泣き伏す妻、門外で急かす仲間の武士たちといった、『平家物語』の平維盛を彷彿とさせる別れの光景が、別れの悲哀に満たされながら、鎧の彩りも美しい場面として描かれている。また「怨憎会苦」では血まみれになって刀を振るうざんばら髪（6）の武者や、槍を脇に掻い込んで突入する騎馬武者らの奮戦の有様も、合戦絵の如く、仏教説話画の域を超えるほどに鮮やかで勇ましい。

これらの場面は細やかに彩色され、「苦」を表わす主題でありながらその意図を忘れるほど、見た目も麗しく表されている。

それに対し「求不得苦」は、殆どが墨線とくすんだ褐色の濃淡で描かれ、わずかに床下の雑草の緑と、乞食男の着衣の白が目につく程度であり、「貧苦」の主題や荒廃した家屋そのものに

は、視覚的な美しさを意識した形跡を見いだすことはできない。

### 三 「あばら家の姫たち」

そもそもあばら家に文学的関心が寄せられたのは、貧苦の象徴としてではなく、平安時代の物語にある、貴公子が茅屋に住む美女と出会い恋に落ちる、という形の話に拠るところが大きいとされる。

例えば『古本説話集』「或人歴覽所々（7）間入（8）尼家詠和歌第三」では、貴人が「よろづの所の心細げにあはれなる」を見歩き、「小さき家のあやしげ」で「煙も立たずさびしげなる事限りな」い所の尼との歌問答により、「めでたく、光かがやく女を隠し据えたる」を「たづね出して、ひとめにして、めでたくてあらせられけるとかや。」と語られる。この結末を高橋實は、娘を自分の妻とし、後見人になって境遇を調べてやったと解説し、この「落ちぶれた女性が貴公子に見出されて幸福になる」という話型が、平安時代の作り物語の『伊勢物語』「序段（初冠）」や『源氏物語』「若紫」「玉鬘」等と共通することを指摘する。林望は「あばら家の姫たち」において、このような発想を『源氏物語』「帚木」兩夜の品定における左馬頭の弁が語る、

世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎（9）の門（10）に、思ひの外にらうたげならん人の閉ぢられたらんこそ限りなくめづらしくはおほえめ、いかではたかかりけむと、思ふより違へることなん、あやしく心とまるわざなる。（註3参照）

という分析から裏付け、左馬頭自身も、「荒れたる崩れより、池の水か

げ見えて、月だにやどるすみかをも過ぎむもさすがにて」と、築地の崩れた家に住む女のもとへ通っていたと設定されることを挙げる。

さらに林は「わらはへの踏みあげたるついひじの崩れより通った『伊勢物語』「関守」の段や、『平中物語』「櫛の木のならぶ門」の段で「築地など崩れたるが、さすがに葎しとみなど上げて、簾かけ渡してある人の家」の女と荒れた宿を題材にして歌を詠み合った話を加え、「塀の崩れたような荒れ屋敷には美しい姫がいる、そういう現つとも幻ともつかないことを、貴公子たちは夢のように想像していた」とし、『源氏物語』の「夕顔」や「末摘花」も、この幻想の上に構築されていると指摘する。これは平安後期の貴族には男女ともに普遍的な感覚であったと思しく、『枕草子』第一七七段において清少納言も、

女の一人住む家などは、ただいたうあばれて、築地なども、またからず、池などのある所は、水草みくさる、庭なども、いと蓬よもぎしげりなどこそせねども、ところどころ砂子すなごの中より青き草見え、さびしげなるこそあはれなれ。

と、「あばら家の姫たち」じみた状態を好ましいものとして、むしろ「物かしこげに、まだらに修理して門かどいたうかため、きはぎはしき」住みようを「いとうたて」と嫌う。

そこで絵巻にも、このような物語の中で男が通う女達の背景として、必然的に崩れた築地やあばら家が描かれることとなる。鎌倉時代の久保惣記念美術館所蔵『伊勢物語絵巻』は、金銀箔を様々に用いた装飾的で優美な画面と繊細な草虫描写で知られるが、「関守」では、様子を見る引目鉤鼻の主人公の手に、崩れた築地の窪みが詳細に描かれている。

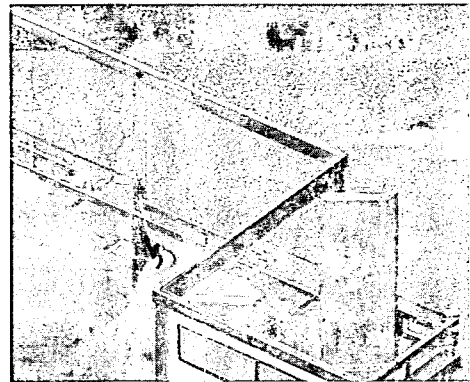


図3 久保惣記念美術館所蔵『伊勢物語絵巻』  
【西の対】部分



図4 逸翁美術館所蔵『白描伊勢物語絵巻（梵字経刷）』  
【西の対】部分

また「西の対」の、かつて女が住んでいた西の対で主人公が女を思って泣く場面（図3）は「男が横たわる建物は、高欄が折れ、縁の板には穴があいてひどく荒れ果てている。「あばらなる板敷」という物語本文に対応する表現と思われる。」とされる。実際、春の月の光を表わして銀箔が様々に蒔かれる画面で、高欄が所々折れて失われた様子、踏板の穴の様々な朽損の形が細かく描写され、高欄や床板には部分的に緑青で苔が、穴を通して月光に照り映える地面が見えるという繊細さである。

これに先行し平安末期の絵巻を鎌倉前期に写したと見られる（註11参照）『白描伊勢物語絵巻（梵字経刷）』逸翁美術館所蔵の同場面（図4）においても、構図も全く違いながら、引目鉤鼻の優美な男

の足下には踏板の朽損した穴、高欄の折れ、散乱した折れ木、隙間に生える雑草などが明確に描かれている。

王朝時代の男女の恋を主題とする絵巻中でも、崩れた築地や朽ちかけた屋敷を詳細に描くことが、「あばら家の姫たち」の物語の表現の約束事であったのかと考えたくなるが、これ以降の『伊勢物語絵』や、『源氏物語絵』<sup>(12)</sup>には、これほど生々しい表現は見られない。築地の崩れは形ばかり、西の対の高欄や踏板には穴もなく(註11参照)、末摘花の庭の蓬も園芸植物のように控え目に描かれるばかりである。これらの物語の絵巻や絵本が、実際の鑑賞の対象としてよりも、吉祥の意味合いを持つ「嫁入り本」として作られることが多くなり、貧乏や廃墟を思わせる負の図様が忌まれたことも一因であろう。

#### 四 廃墟に興じる

しかし「姫」の存在は、「あばら家」に不可欠なものであったのだろうか。『枕草子』一二三段「あはれなるもの」の終わりには、

荒れたる家に葎<sup>むら</sup>這ひかかり、蓬<sup>もみぢ</sup>など高く生ひたる家に、月の隈<sup>くま</sup>なく明かき。

が、挙げられている。ここでは男を迎える女や、女を訪れる男の舞台としてではなく、廃屋そのものの風情が取り上げられているのである。

廃園として後々まで知られたものに、源融<sup>みなもととよなる</sup>の河原院がある。『古本説話集』「河原院事 第二十七」<sup>(13)</sup>にあるように、この庭は左大臣源融が陸奥の塩竈の形を作り、潮水を取り寄せて湛えるなど「さまざまをかしき

ことをつくして」住んだものという。融の死後に献上された宇多法皇のもとに融の亡霊が出たといひ、『源氏物語』で源氏が夕顔を連れ込み怪異に遭う廃院の場面の基になったとされる。

説話の後半は、宇多法皇亡き後の荒れた河原院そのものが主役である。かくて、院失せさせ給ひて後、住む人もなくて荒れゆきけるを、貴之、土佐より上りて参りて見けるに、あはれにおぼえければ、ひとりごちける、

君なくて煙絶えにし塩竈<sup>しほがた</sup>の浦さびしくも見えわたるかな  
その後、この院を寺になして、安法君という人ぞ住みける。冬の夜、月明かりけるに、ながめて詠める、

天の原空さへさやかにわたるらん氷と見ゆる冬の夜の月  
昔の松の木、対の西面に生ひたるを、その頃、歌よみども集まりて、安法君の房にてよみける。古曾部の入道、

年ふれば河原に松はおひにけり子の日しつべき寝屋のうへかな  
里人の  
てむだになかるべしいは井の清水草生ひにけり  
道者が歌、

行く末のしるしばかりに残るべき松さへいたく老いにけるかな  
なむとなむいひける。その後いよいよ荒れまさりて、松の木も一年の風に倒れにしかば、あはれにこそ。

と、この説話の名園は荒廃したゆえに、鑑賞の対象となって「あはれ」とされ、歌にも詠まれているのである。

さらに、建築の荒れを趣向として用いた例がある。『大鏡』中「太政大臣伊尹 謙徳公」の花山院の記述に、

また、撫子の種を築地の上にまかせたまへりければ、思ひがけぬ四方に色々の唐錦をひきかけたるやうに咲きたりしなどを見たまへしは、いかにめでたく侍りしかは。

とあり、屋根が失われた築地の土に植物が生えている様を、撫子を咲かせて華やかに再現した、花山院の風流者ぶりが知られる。あばら家はそれ自体が、和歌の主題でもあり、風流の手段ともなり得たのである。

### 五 貧窮を描写する

この花山院の描いた絵は面白かったといい、『大鏡』が挙げる例に、

また、徳人・たよりなしの家の内の作法などかかせたまへりしが、いづれもいづれも、さぞありけむとのみ、あさまじうこそさぶらひしか。

と、挙げられる。金持ちと貧乏人の家の生活の様を描き分ける趣向で、いかにもそうありそうな出来映えであったという。もちろん『大鏡』は、架空の人物の回想という形の記述であり、この花山院の行為が事実であるか否かは判らない。それでもこの時代の貴族にとって、貧富それぞれの生活描写の絵に興じるということが、受容できぬほど不自然な話でなかったことは確かである。

実際、六道絵の「求不得苦」のような宗教的意図の主題とは無縁に、ことさらに美しくもない貧家の様子が絵巻に描かれることも、背景としてであれば珍しくはなかった。男絵と呼ばれる写実的な画風の絵巻、例

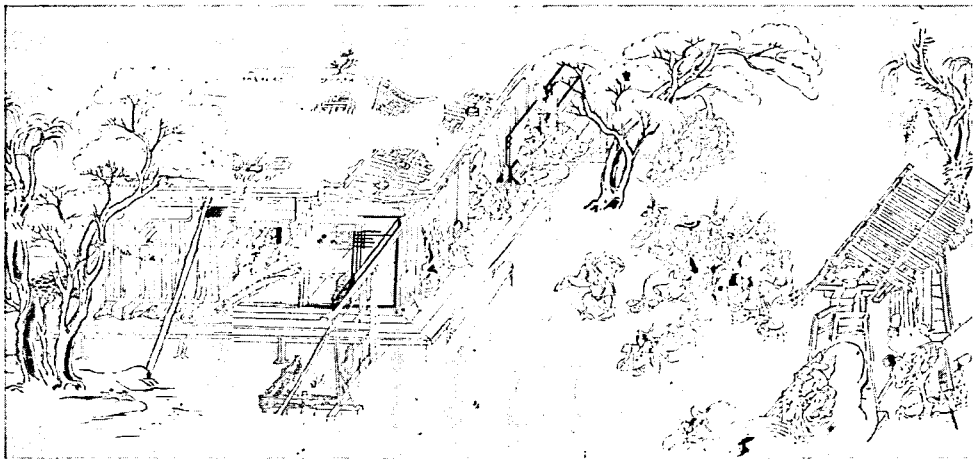


図5 模本『年中行事絵巻』別本巻三が「安楽花」の邸宅部分

えば東京国立博物館所蔵『餓鬼草紙』『伺便餓鬼』の場面の街中の便所、『伴大納言絵詞』『中巻』の子供の喧嘩の舞台となる舎人と出納の家の前などである。

なかでも詳細に貴族の邸宅建築の朽損ぶりを描いたのが、『年中行事絵巻』模本の「安楽花」の場面（図5）である。

『年中行事絵巻』は平安末期に後白河院が描かせたという大部の記録絵巻であり、絵師は宮廷絵師で男絵系の絵巻を描いたと云われる常盤光長とされる。原本は江戸時代に焼失し、現在は模本のみが残る。内訳は住吉家旧蔵本に基づく十六巻分と別本三巻分で、この別本巻三が「安楽花」の行事である。

原本は著彩で、模本にも色の覚書きらしき書き込みがあるが、現状は輪郭線のみ白描である。詞書によれば三月十日、高雄寺の法華会に京中の女童が詣で、舞い奏でる。それが街中に出たのを、棧敷ある家に呼び止めて、舞わせて見物するのだという。

注目すべきは、安楽花が呼び込まれた貴族の邸宅である。棟門の屋根板は櫛の歯のように抜け落ち、右の門扉は折れて失われている。築地の屋根は失われて崩れ、見物人が穴の縁に足をかけて登り、首を並べて中を覗く。前庭では安楽花の一行が舞い、縁先には直衣か狩衣姿の男達と子供が並び、御簾の陰では女達が見物している。部屋の内には柵があり、琴など使いさしの調度品が描かれ、ここが生活の場であることが示されている。

まず目に入るのは寢殿の屋根の傷みで、入母屋造りの屋根に葺かれていた檜皮は所々大きく剥げ、下地の野地板まで剥がれかけた箇所すらある。剥き出しになった横木には石が重しとして載せられている。棟からは小さな木が生えている。手前の軒下には倒壊を防ぐために丸太が斜めに立て掛けられ、縁の下の柱は斜めに歪んでいる。手前の透垣は殆ど抜け落ちて棒のみとなり、二本の丸太で前後から支えられて立っている。

華やかな安楽花の舞台としては、あまりに腐朽した邸宅であるが、行事の内容とも関わらず、詞書でもそのことには全く触れていない。この場面で屋敷をあばら家に描いたことは絵師の創意であるとしても、単なる点景にしては、荒唐の表現は細かい。花山院が「徳人・たよりなしの家の内」を描いた逸話と共通する、貴人が貧家の「さぞありけむ」と思われる生活描写に興じる、という趣向の存在をうかがわせる。これは文芸も含めて考えれば、自家を「伏慮の曲慮」と詠う『万葉集』巻五、山上憶良の「貧窮問答歌」以来、決して珍しくはないことであった。

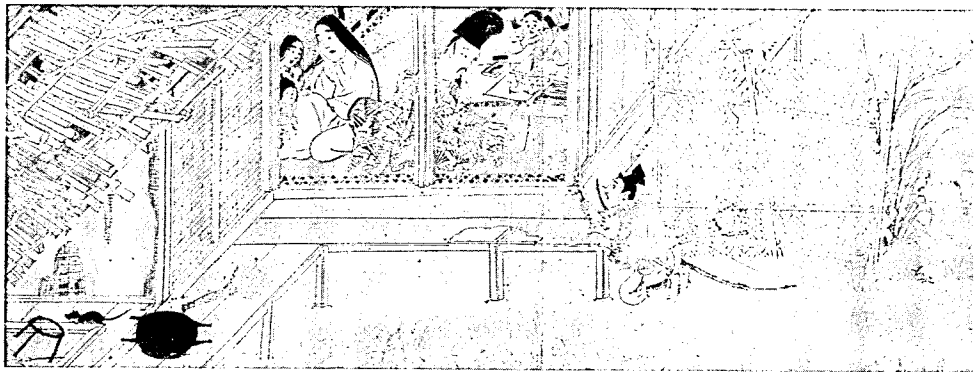


図6 宮内庁三の丸尚蔵館所蔵「絵師草紙」部分

この趣向の延長上に置いて見たいのが、鎌倉後期に描かれた『絵師草紙』である。この絵巻の内容は、実収のない伊予の国の知行を賜った絵師一家のぬか喜びと訴訟沙汰であるが、描写の中心であり最も鑑賞者の目を引くのは、絵師一家の貧乏、殊に家屋の朽損ぶりである。

知行の知らせもたらされた絵師の家は、雑草の生えた庭、穴があき踏板の落ちた縁側、壁土が落ち木舞が剥き出しになった壁、格子の折れた葺、帽額の取れた御簾、破れて棧の見える障子、傾いて閉まらない扉を支える棒と、かりそめの祝宴で酒瓶を持った男が縁側の穴に足を取られて酒をこぼす場面へと続く。絵師が使者から伊予国の知行の実態を聞く場面(図6)ではさらに、枯草の中に破れた檜垣、傾いた家を支える角材、すり切れて下地の出た畳、ばらばらになった屋根板の細密描写が

加わる。

絵師とその家族の顔貌描写が巧みであることも加わって、生々しく絵師の窮乏生活を実感させるとされる場面である。その評価に異論はないが、ここに描かれたことの全てが現状の写生というわけではない。改めてこの絵巻を見ると、家屋の腐朽に比して、他の事物には貧困を思わせる表現はない。家具調度品には、庭先の檜桶を除いて傷みや破損は無く、登場人物の衣服にも、六道絵の「求不得苦」にあるような布の綻びや破れ、寝れといった描写は、遊び盛りの子供達から使用人に至るまで、一切見あたらぬのである。

このことから、『絵師草紙』の建築の著しい朽損ぶりは、絵師が自宅の実景を写したものと考えがたい。改めて見れば、雑草だらけの庭穴のあいた縁板、壁土が落ちて木舞が見える壁、壊れた垣根、斜めの支え棒などは、いずれもこれまで挙げてきた荒廃した邸宅の絵に欠かせない要素であり、いわば「あばら家」表現の集大成である。この絵巻は、貴人が貧家の細密な描写に興じる趣向に捧げられたものと考えられよう。

### 結 「蓬生」の簀子縁すこえん

以上のように、平安後期から鎌倉時代にかけての絵巻には、しばしば邸宅の朽ち果てた様子が実に詳細に描かれることがあった。これは王朝文化の中で、人々があばら家に託す思い入れを反映した結果である。

すなわち、単に四苦八苦の「求不得苦」の表現として貧を厭うのみではなく、茅屋に身を隠す落ちぶれた姫君を貴公子が見出すという恋物語的な幻想や、荒廃した邸宅を「あはれ」と鑑賞して歌を詠む詩情、また貴人が貧家の生活を細密に描写して興じる好奇心ともいべき趣向の対

象である。そしてその建物の腐朽を端的に象徴する表現の一つが、縁板の穴であった。

「蓬生」の簀子縁すこえんの、悪趣味とも言いたいほど執拗な朽損描写の背景には、このような廃屋に対する嗜好と、その絵画化があったと考えられる。貴人の顔を抽象的な引目鉤鼻として表すこの『源氏物語絵巻』の中で、この邸宅の「あばら家」ぶりは醜悪と見られて省略されるのではなく、朽ち果てた簀子縁すこえんのみが具体的に描かれることで、末摘花の度を越えた窮乏生活が象徴され、理解されたのである。

### 註

- (1) 徳川美術館所蔵、『日本絵巻大成』一「源氏物語絵巻 寢覚物語絵巻」中央公論社 一九七七年
- (2) 秋山光和「源氏物語絵巻の構成と技法」『平安時代世俗画の研究』二二三～二六四頁 吉川弘文館 一九六四年
- (3) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『日本古典文学全集』十三「源氏物語」二 小学館 一九七二年
- (4) 聖衆来迎寺所蔵、金井杜道撮影「図版 六道絵」『国宝 六道絵』九十二～一〇一頁 中央公論美術出版 二〇〇七年
- (5) 山本聡美「図版 六道絵」解説『国宝 六道絵』九十二頁 中央公論美術出版 二〇〇七年
- (6) 加須屋誠「全場面解説」一〇人道苦相Ⅱ幅『国宝 六道絵』三〇九～三二二頁 中央公論美術出版 二〇〇七年
- (7) 高橋賢「古本説話集全註解」五十六～五十八頁 有精堂 一九八五年
- (8) 林望「あばら家の姫たち」『新潮』八十九～四号 二二〇～二三二頁、一九九二年
- (9) 松尾聡・永井和子校注・訳『日本古典文学全集』十一「枕草子」小学館 一九七四年
- (10) 和泉市久保惣記念美術館所蔵、『日本絵巻大成』二十三「伊勢物語絵巻・狭衣物語絵巻・駒狭行幸絵巻・源氏物語絵巻」中央公論社 一九七九年
- (11) 千野香織「和泉市久保惣記念美術館所蔵『伊勢物語絵巻』」『日本の美術』三〇一号「伊勢物語絵」二二二頁 至文堂 一九九一年



- (12) 『袁華(源氏絵)の世界』源氏物語』学習研究社 一九八八年
- (13) 高橋貢『古本説話集全註解』一三三〜一四〇頁 有精堂 一九八五年
- (14) 橋健二校注・訳『日本古典文学全集』二〇「大鏡」小学館一九七四年
- (15) 田中家所蔵、『日本絵巻大成』八「年中行事絵巻」中央公論社 一九七七年
- (16) 詞書は、唯一この巻の模本のみにある。(小松茂美「年中行事絵巻」誕生』『日本絵巻大成』八「年中行事絵巻」中央公論社 一九七七年)
- (17) 宮内庁三の丸尚蔵館所蔵、『日本絵巻大成』十一「長谷男草紙・絵師草紙」中央公論社 一九七七年